白石先生紳書

七八

特

漫録

内閣文庫
和書
類
三五四六六
號
五
冊
二一三
函
一六
架

第一

共五

内閣文庫
番號 和 35466
冊數 5 (4)
函號 212 273

国立公文書館
National Archives of Japan

白石紳書巻七目次

一加州医師坂井順元系譜并順元物語
一丁酉十月八日谷ゝ和ゝ
一上州勢多郡花輪の文珠院の事
一小松中納言殿菊奢侍と清水の事
一北地三ヶ地踏ゝ事
一戊戌二月十日地震大雷の事
一堂倉浪物語関ヶ原後の事
一服部清助物ゝ
一戊戌閏十二月両森京上京物語
一八幡宮の事

一宝剣勅物御汐湯元[illegible]

白石先生紳書巻七

一賀州医師坂井順元

小瀬甫菴―就安―就安―泰順―順元―就安―就安　二男　三男

甫庵ハ英流の古法の厳流ニ伝授の下ニ赤川家ニ[illegible]
[illegible]れ坂井右近と称[illegible]して右近子孔の後坂井と名
[illegible]ちたれ―[illegible]坂井ハ高ニ家号ハ[illegible]て坂井と名
[illegible]て関白秀次ニ仕[illegible]秀次の[illegible]ニ―時ハ左肥と名乗
て[illegible]後又小瀬と改[illegible]坂尾の家ニ仕へ雲孔と称地の内
今れ松江の城をい縄張[illegible]上総の名有[illegible]松江

名付け南蛮こうせの鉄無坂井と名のりて賀列の医師
となりて仕へうり南蛮の名ゑて後ゑれつゝにしてて
祖給り加列へ来りて女子一人とまうけそれをむこうりて
小瀬と名付ゑ嫡子れ鉄無の坂井と名乗てをでよ
百年ゑ乃ち一所りも加列の宇お坂井と名れるい
一時のゑまさ〳〵小瀬の家引継しうと名れるほ
さやなりと宣ひ〳〵と丁酉六月の世りよいひり
小瀬の家紋ゑうえれ坂井い毎ノ九と紋を以ゑ家も
南蛮こゝ古文をお多〳〵と云中と始と
ゑうせ〳〵れた乃ち〳〵ゑい長尾い松永輝ゑい小野小
随風助今の宇和い世を以太閤の陰嚢の大きゝて

馬と宗うゑれい作り出ゑれ〳〵乃ち宇〳〵文書と云て
ゑう字〳〵と以ゑ〳〵ゑう紀

一此元亥三十年ゑり前加列へ弾月と以ゑ六十ゑりの光信東
りて加列城下れ犀川と人ゑ一ツの川の東ゑ流し〳〵とゑて
昔い此水面ゑ流ゑ〳〵ゑい流れゑ〳〵と以ゑ事〳〵
乃ち城下の西百ゑと云ゑて此ゑて義経と留樋
ゑう酒宴ゑ〳〵ゑつゑ此ゑれ関ゑう流と逝ゑ〳〵
流れゑて酒宴〳〵ゑう紀昔のれゑうゑ判官坂十二人の
俗ゑ山伏ゑて通ゑれ〳〵なゑ流ゑもなゑゑこの
此ゑとゑれ〳〵たも百にゑ十人ゑれ人数ゑて乃ち
ゑとゑい紀此殘月ゑ以ゑ義経居と能ゑ寄れい誠後

れ田中と云宿のかりやに一宿と能りて小松原宗雪と
ゆ六十斗のものと同宿して穀と絶て唫吟れ
脂と炼りて服餌す二人ともいうなるものも新に
たれたなりにいひ出して云侍へ不殘月の常陸坊海尊
さいひしものも小松原乗井出帝といひしものもさりし昔
なる国と言ひし所のものとなりて義経記さ
仲雪と讀て言ひうくいへい言ひしていひ仲雪
にんくしるむるくそるの角をつまこそ
といいて言ひしこそのるものいひ出るものなり
松脂と炼れ法いを仲なるとにんくしるおされたるいひと
云く

一又頃元云宇加別の郡人宇地義人の先祖青地に所屋
といふ宇地後河るるこ此屋の美さ何の美よ名鮮
よ渡りるると歴ことんて孫愛ることて美さめて後み
法ふ宇地海の京と美にんし抵よ写して抵屋風を
したり十四斗り後に朝鮮国のる初りて宇地られむ紙
るしるる孫愛るしてなられ昔美ん一和に似りる
ものの試のあることてられ屋風の絵と引るかして移り
てんよおも遠り京を愛ちいるをなふ川ものし
ものよりも又いのと移り正ものと正ものよ正り
昔美ん一法ものて大きに宋ものもし誠よ昔美
しとと今宇地の郡よ宇国やいものと同よいるやや誠

りんを図とおもひまはいなりと云ことを

一又順元云ヒルムを口をもつて水性

麝香と云州へ下性とをんをしてをよ水薬

一順元又云加茂清正の医師名ハ知れず。ひろ高麗陣

の時ハ朝鮮にて名ハ清正霍乱散の方剤弘之ことを

を料と用ることを渡りしを栗のゆく旨くひよる者し

ハ不換金正気散ハを服をもちをよ除をなれ清正の

医師いろく旨人の病を同一人を験ひハ旨く除ること

誠ハ与へき薬有といひて一人ハ人の薬と与へるに立

所ハ与へしをハおもてそれ病ハ与へる意く

ることひろ方を与へをよ香蘇散を攻と同ハを

陣中にて鬱とをるるひ所なりとハ思ハれ清の大なる

家中も旨を香蘇散を癒ることを思ひるとなり

一丁酉十月八日ハ谷平ひし時ハ波ひし城ハ西宗奥を云

しもれ初メハ九郎兵衛にて菓子湯のるに名と思し

ものをて大閤にも東照宮ハ召ハるを与ひられしなり

をれるを孫の彦ハ今も大閤ひ陽し道服ひり前

掛の金織物ハをびをの裏なり綿ハ入ひ

東照宮ひ陽ひ四方級をいをもれいを菓をを

今ハをびをの中ハ人ハ行ひ。紙なるハをれもをびをの

裏にて給ハ入られひ今の製をハ者り神ハ二ツ

なるひ一幅まをて四角なるひ神にも

狩一胸級の喪のこれとなりつけ級となりしもの
なるこれもれい 東照宮の御代に義なりて西洋より切
支丹の法となりて法と学ぶより三度れ後より
法のもれつまらしらふかりにしてこれを敬の正し
きぬるいはもて唱ふかの初西洋に銃一付の御
りてこれを法と窺ひ高きもおもしくこれ実
にいたらぬるものの出流状とし清にて御所公も
を出流状を除の御りぬ
なるとしもて例に御所又云堺の富豪の御業を云
もこれい昔の今のはごとなりしるの御所
旅人とをもて所を変に津国宗及とし

御所の系の湯の為を一先て大国に来るをれしといと
ひとをまるこ千與とし業務をもとめ
て利製をもめて利体をもて系をもう先後のいの
千利休こを宗及の大徳寺紹鷗和尚の父にて出医の
半井卜庵の外祖父にて先の孫也牧今の堺の御
又小西摂津守の父の出法とひしも堺の業務要とも
こをれを国姓のものの孫今にをこをく利製の後
い清の宗とをて為を沢摂津の家元の系元化為を云
して堺の町人にて国姓の孫今い富有の
町人にて侍り

以後上の文字字

一 月十月十四日より今の居宅の地の為を為を出をとをべて

特に昔いひ伝通院の裏門前の町人の居宅の裏
の陳の地をこれ亦の裏より亦のうちに七十間斗の地
有りい不槿の垣をもて囲い細細道なりとて行き抜
侍通院の往来家観和尚とばかり公儀にて侍通
院掃除奉行のものよりなりまとえん
寺料寺院にもとを除きて町並なりて端々
寺のもとれかい寺れかくゆうさして侍通院頃の図一石
亦六斗れ亦と除地となりて町並なりて和尚よりの
〜寺もれ十六人る和尚より給りうるい寛永
二三のれられるとえんくうりて町並なりい後り
此後のうちなりの場と寺うり寺寺のうるとその

時の代表も又寺れ没えんかるれる細〜ちくさりしうえれ
方丈より亦寺清より作て没者とうるて場と寺寺い
ちて亦寺寺亦ちとなりて出せるゆえくる渕うえ
ゆい亦寺寺院裏とはめて町並亦乱しうて裏
乱なうしうい乱乱〜んうと彰院なれるる寺清より一
年とうとーと寺ゆうえ寺のなれい亦孫たる伯鎮
後より二人寺りて亦寺寺乱裏とうんて同と寺坪さる
と同いれーよりくとーとれのいうおもいりうる院寺といひ切
うういうにもうん方なりて付ゆくて寺の方丈ーせ
に方丈より時の寺社なり清年清院るの清より寺清られるより
十月の十七斗のうち亦寺寺乱清のとれ没て場よ

こその地のうはかこひ願ひのもの多ありし此よ紙と持
て新地をねかひ願ふ事をもしとうは更ニ又よ紙と持て
延の表ニ訴よ元日寄会ニて今回も寄合して紙の訛
とんて文面之しと計りはしかいる事もしとやて文書て執
て宣れぬく表を建る事もなくして此町並の名もそのうちの表
地をうはねかひ有事も済し以後は事済ふるよなりたり
来る名にして有るといは松林寺と云新寺を建てそれ
名宅は今の伊勢屋が地境より東へ取りて百六十坪計よ
作りてありし此後水戸の播磨殿の御邸不なるか所々古
跡の地を買ひて寺を建立有へしと之ひ後よ播磨殿も卒
しのひて後新講のことをもとめられしやんとくなりぬて

られ永年し古跡の名を地の後よりう渡されるよ付て新地
なりしてよ来りられしは播磨殿なとの子孫の時より七八年
以前のことぬ一し此所悪云ものもありて松林寺を買取ひ古跡は
なしとて寺をたりぬれは此所よ寺を建ることは此後
主之うにたと成りてよりは松林ちはいかなとの表坪を
関れしかは百六十坪程よ往居て立よ出来て此所よかこね
表の事は寛文の頃中比からしと表る流りぬれは此後表
地れるよ於てしへきではか又余の所よ表坪の事は寺よ
付てやしゅくと意えたり各のやとしめ此隣の地をふ
昔よりれ門前町なれは後のちの地役あまり来れり此
不は別段にようて町並てなされし不ゐて此町屋の助成

とゝて清白通流れも此役所よりしたおつとめなれは別に
公役と云ふもはづされし室町といふ名。然り此所ハ
さ九支配にもはなれたれは乃ち酒もあり所にも新地ト
称せしは此の書られしものなし、東云忠か方に称
く日記を見るに此町並にして此流のみなは又問しる
ぬ所なる故此家抱屋敷は此定の事にて先年も御渡
らぬ事にて然り又此下前の小石川の流しの今の所よりは
なるは此自以敷になるもの事は何よりは南の方昔の
流の所と幅二間斗りの石橋ありて町幅は広く此流の所
中かられ橋より越りては込合しては東云忠にあり本なくして
取年此中に訟へてかれ橋を此宝文の元和の力にて取

幅のめくまられし今の所にては河岸の河に又此わきり
出火の間にも人込今の所のたたにの方に難儀の事ありし
やうに此所佐橋内能く脇の伊勢伊勢などの市中の河の
なすへし所公儀への成事にたなりとて申されしとて目安
らは此流と家との屋敷を此方へ出し端々へしとやうえ
は地つきにて地の外と今の内に屋敷と抱されしとす
既に其人に及ひし所之中に所もいまだありとて又此なして
境とを立て端りしは町中にまじし流と町とやすとして自
今屋敷の限りとなし梅町の中此地一間を除て是流とを
つけはらとやうに梅忠の酒井等社年始負言に年らし
の事し之

一丁南十二月十三日こうもりて生れ乃に一荒井の末流上州の山方
磐梅弘法寺の文殊院出石に満次郎義元の書一対と常住して也
弟に対面して祖父のるすに南河のるを尊問し
て祖父曰豊源氏加賀爪の遠祖より出て牧西と称とする
もとこれ井と称とするもとこれ九山と称とするもとこれ上野也新
田弘大田と云処の荒居に居住とする荒居とする六七世の
祖父なるの左衛と共ひて後に出伏と称されて後来の
るまと始て京国あるひとこれ来られ祖父つてさて
る世して後嗣としてはこれの知かなるのれと共ひさていらち
も一族又嗣るのれて孫なるの出て行る助とぬしと
てのらちと女のんて人も後後の者となりてこれ孫の

ゆるしなるんまい悔むこさ法あるして思ひて与ふこさて
与ふ一と仰くいられと弘こさ知ると共ひさ知ると荒居源氏
とのくと云ふ感心一通おいう弘ふこよるれそもうんこ法
云ふこる新田相と法源法爪爪別を清源谷源七こ法
江法新こ働法こ力一陸と云ふと云ふこれ輝義と
ふこいふむと知ふこの対よ情さられと知ふこい新田弘尼
義人の行下に戦に味方に負しは兄祖ていられ義助とな
戦ひいひ一ると義助のこると自ふこと法りて
いひ一と法の系と知ふこれ清は法源及の嗣と出て行ふ法ふこれ
後嗣ていられと法ぶむこて元て法きいひ一法と人と嗣海
して殺されてこ者も失てこれ文書もふこ加ふこん源

方なくなりて失ていひさまよひ求てはいんりゝ
ゆくへもしらずなりぬとそれも世にやうてそなたこゝよりはよ
ばちて必ス世に出るべしとて義の紋付と問ふ今の荒義と
ものれこれ二ツ引両とも丸ひとつ也世に憚るゆへ第一こ
丸ひとつ也とも伝ふる三ツ引両にて丸ひとつ也
伝ふるとも荒居の巻とうの上有とうるひとまと問ふい
されいそこと尊ひ也ものの荒居今い武蔵なりは
ものしされど今い荒居ハ八幡の社のいと工人ハ岩松の八幡
れ社居なりと物語荒居の八幡い義貞旗上ゆの国をうり
一日に強金鶏号と物語とものしそ今も武ふるゆの十軍に伝ふ
にい必ス一度い系語ハ取別ハ出居ものゆ遠ものう

そうれしのれ後ハ男よりして荒居のかそうよ新田の氏
族のれ遊行上人のまよりなりしもれ又大光院の男
るくしもこも面読に伝ふそれ男よりなる伝ふ迄
家と継をていひしそれい伝れ所ハ住せ居宅なれい伝居
とものしそもの伝ふうり又荒井のそい室の尼をかしら
住一居宅なれのうくものせしもそうしも亦面読にこ言
ハ亦いひしい義貞れ為ハ大叔又ものよりて新田義人を弟
義房の男ハ荒居禅師光義とものしのしか人禅師とハ
るれんはぬるとそひしよ物い人貴伝ものそ荒居の一流
と伝くしよりて何の人荒居禅師とものせ必しそれ人の
昔居ものしるなる故に御居とい物せしものそ物いにて

ゆゑに武家の昔より世に出る処は新田の一族と申す説
ていとなりなれどもなほ荒唐の説多い元是遠光
以後ちりつもれる血脈い新田氏継しゆゑにくいかけて
しといひつる武紋菱くしといふ荒唐とふ武紋菱如一
両引両といふい満次郎義貞のいひしこと白れるなれいもい
新田の幕の三引しこ毎面ものるると問ーは武おう紋をそう
に紋私紋の名を又い細紋百枚れとかれ二百五十人の豊
常と武許と紋東し武あも又これとう彩揚のると概紋
て礼とも名ケ也ーいたれる毎の元日ふ悪くるる乗り
賀ーは二日と乗れるるといたるれる中て級急のるこれ
るとれつる流例とかれる紋二百五十人ものいる名を細元

れるく武るまて名字とせしこのたてい細と荒唐字い
ゆるされ新井といふ字とあるし来りてひしこれいもい
武ーるるとをもあるいい紋るにめ紋ーもいれをいか者
いいれさて名分ふ中変紋波上中城後紋ふの紋験名の元
千人斗れると引りいるれ名を中後院のいをこれ紋ふる
るたいいるくく武ふるて紋ふるれ紋ふる
昔れをーみて今も紋者いいんもれいられ二百五十人のたれたいと
云南紋いるていれる文保院と後り武い観音寺ーこ亡
七代いるくる所をなりていたれ今い武武の人く紋とれんれて
昔なつくーく人ても国と流しの人をもも毎に武とも紋ーを
いひーる殿のくてい人いーて双とるるるをいなーていさ

海に出養のるとて二日ばかりよりのつん家に宿とて通る
船は海にとて帰れ〳〵帰れとて小松中納言殿法華院にて蘭
一 二月十四日宮流浪のいひしに小松中納言殿法華院にて蘭
香待と久しくさうびに更に入りさせ給へ給へ
さしかに就京都は離れ給ふ
なとのすんて流ひ給ふ
きさせのひは中納言殿法華院にて
しにたるとなんいとなりとて
一 北地に北陸のるを前大納言殿石城に私に北陸にて城中
れ人民をの失て平地をなりしに又氣ふんうしうち
ゆも茶臼山とひしに出をれるに夜の間はまいらう二つに裂て

それ〳〵流れ川と云川と堀メて城下の〇〇〇と云三百余
と流れるこの川端の百姓と手堀メて一家皆〳〵死しう
をれるなれいこたく流つるりしう仕よて出るに東
ようと引て川と塞きたれい氷ひとれと宰相殿家れ人と
りてられ侍氣の上とよく塔刻て皆の縫こふんうちよ
助ケよとて下知ふれしうと大山の巣裂間ケしなれい左右る
く塔出スるも叶いばして完しく死骸半り皆く塔出したり
氣毒なと二人を殺されしうい家れ家のるこ今いきこれ
こ乗りし川とめこうて川と塔て水と通ちこ
これは有〳〵出羽国山この塔和の間泉沢といひて塔
下より三里半海こる不の山端て湖となるこう今いこう

二里斗先にて水ふきたち八尺ほとの高さに吹上め上下往来の
中きはにて人もおほれ二人死し池となりしといふ
一 戊戌二月十日の夜五ッ半時分よりやゝ大きなる地震ゆれつゞきの
にいたりて盤石なんと落したるかことく地より響きてしたしく
の新地の中ほとの所より裂て風吹出し候所は七日斗も続き
所々風吹出しとしによりて雨又雪しくなりて雷鳴
東より始て大きなるひかりし事夜に及ひ候て明日迄しく
にまふれりヤウゼン寺 字守又へし 浄土旦林こと と云寺の観音堂に落て光
諸の耳に入られと申し候所に屋敷に落しましと云へし又申す
しき又申すには本にての町に本多弥兵衛の子左衛門といふ者の屋敷の
長屋焼て二つ向ひなる小林宗左衛門屋敷の長屋の屋根も失たり

新の橋くずれしなと云へし近き所々の人々して死んとしょ本多の長
屋は三十間斗の屋根一つもなく落ちたる屋根は九山辺なとより
さくらしこ落散り家人多く失たり死して殺の落しも有り
なと云なり向ひ屋敷は七八百尾の柄しりと失とり本多
勝の屋敷も破しまつん〳〵たり本多の屋敷より漬し町屋もかし
死なる家二ッ三ッ破しより町屋の家れ失しも死せしもなく夜の
五ッ半比まやみゆふん風の吹落ちし中にてかゝなりきりこの
すへりかなた荒れと町のものたちしと云文後て申す本多の屋
敷の井中より新泉わきと云ひしまゆうんとたりひし
かはきまで人として能出たしまさ此れ申さしといふいまだ詳ならず
らきし此後ておとろの町人々とはまつ十日の夜の前て地震して

[illegible]河辺より大雨雷しきりし後ないだ大風なる吹荒し[illegible]
[illegible]地こなたこなたに河なるも矢[illegible]
[illegible]れ[illegible]しきりに出てたんよりなる中なる世尾三十間半の尾
根とだのりされ[illegible]地へすちゆるさて尾異の[illegible]程砂なる来て
[illegible]ようと又[illegible]藤のを[illegible]根とりて人の世尾八百坪の尾根
[illegible]の大波へ根より上とりちらして[illegible]根を
[illegible]れかき根下の尾異[illegible]迫く続き一町尾倒し
[illegible]第[illegible]かしら[illegible]跡の[illegible]とんな
[illegible]ちるもまぐさきで[illegible]雑[illegible]きい一町[illegible]尾
根[illegible]なるいなさるる[illegible]ちらして此[illegible]しきん
[illegible]ぬるに[illegible]とこ[illegible]此の雷[illegible]抑[illegible]迫り日[illegible]

[illegible]南方い電鳴[illegible]とこ[illegible]夕後沼の[illegible]の[illegible]胡桃樹
[illegible]根[illegible]根て[illegible]水の流[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]根出[illegible]完出来[illegible]完[illegible]の[illegible]
又後[illegible]川[illegible]水[illegible]の[illegible]
[illegible]中[illegible]遠[illegible]の[illegible]
一
昔[illegible]
[illegible]関東の戦[illegible]後浮田又[illegible]
中納言の長男八郎の乳母いかげ失[illegible]
[illegible]女の外[illegible]抱て中納言室の[illegible]
[illegible]知[illegible]
[illegible]

んとてこれ申しつかはしたるとぞいふなりしかるに大御所の
御旅宿へ遣はしたる義ゆゑなきのみにあらず恥ひて主
自ら急ぎ馳せ帰りうつ中納言の家加賀利家の旅宿へ使
者をもつて京においせしかば利家のいはく拾年ものあれいまだ
育ちらしまるみとんなかくは言ひ出されうるくて人
ちがいんまておいせ中納言の詳なる仕方ならはし
とのまふ旅宿なる名書て三百石の
取と給りて生涯後代実加賀の家とて清とかて一心坊
と名付呼い三歳にて母より離てそれ面親をも見ぬ
又母の配不ていろかうりんと己が身の上れる何
ん為くてあるくいろかりしてこひ母の面ともしんてて

ひめられてあるかのるを知らんもりれるるる
をしていかとこひしうの信ともなりてあるともみを宮い
し祖母あをへるかとのるかと上中にかりるくて台徳院殿
四上洛ゆくに二条城へ入せみんてしるひ時よりんあの中
ゆをりかて一対の書とをけうを流おくるるとい立不
にをりて生活るるしうい四位乃人て院よりかりんをとると
出家のたんに助くしとはれしかいを秋てをくいを捧書
との御書の内へ入れて来代中と御覧して後より前大和守
代をしとをりれい石紙らるをりの関ちるをりもの一何より石位
をしとをりとをりかい大和守られ信と具ををりを欲ひ法いとと
も配不ををいしを信ちへをを中と望ををりをりをりいくをるをいい叶をを

さるゝいふも是ひ止まりさせと仰下されしかくて
歌ゆゑにて立むかの叶とおもひ
ゆゑにて立ふ仕ふ母とを迎されて対面させ
れうう親者四歳に仕れ三歳に成なたに捨ひ
其の今河の所より立て出人と称て名乗るれ
てしと既に母の方に成れと仰下されうう乗れ
るこてい立ては人の法しにひ成ると既に
是ひ立ていひつ今河の所より立て出人と名乗て
立こさるゝ名乗るれいさひ歌なか仕と成る
しさと母なるものゆゑ切てう又仕とりて仕下されて
海歌一家の日後なれいうくさに海法ちしと母も又参り

事仕ひといこで是ひ当ちぬ〳〵これくの外は家望ゆ〳〵
仕るこんふゆ系つきてしちく山法ちこしとのうす
なう仕形りて仕ふ母れ面とんいんるいたも叶くふ法ちい
母今れ祝ん毎て日とも送ていんやれ山法いんるい
是こるこうるいれこちす行るも移ゆ〳〵ゆ〳〵
と仰下されし祝は八幡後に加
祝て行ふ人すして加笑中湖えのあふちし仕
ると是下ちくしとゆれいやて中湖えの詳こ申仰
下されう中湖え法しみて形りぬとこ是しして年
毎は小粒の金いれとこ海業和の荒用の和の数遠うこ申
事仕るものと送下ちるこ成ちく今こ知こ八幡れ後の人

に年〻よ物送ぶらるゝ以一心院殿より記とゝ
和一心院とゝいつまれるにも和んの後と行つゝと御下さま
うゝゝ去程よ高野の大名高野へいまし
しうと高い世に至むかのゝ行ちゝとひさいらくゝ加
賀中納言の詠よ返ゝ有られ歌のゝ詠
ゝ一ぶに御はとて詠う年ゝ程の御と場
たゝうゝる祖のゝるなりしかい事ゝもなくて
ゝとゝゝもれも御はいゝ祖なくて死ゝ後も絶ゝ
かゝる母ゝしかい又ゝるゝも有ゝされとゝゝよ思ゝの情
の於ゝゝたりいへぬれい身とゝも捨ゝこれゝゝ
ゝて行ゝれゝゝ後の代れ有ゝゝゝよ事い

台徳院殿のゝる母ゝ若の方れ
御情とゝゝれゝこれゝとゝゝ鰥寡孤獨と云ゝ
るゝてゝゝ有ゝゝれとゝゝふる今い世よ知ゝゝものなさう
ゝゝよなりぬゝいゝふゝゝ

一 三月十二日服部清助のゝゝしい 大猷院殿の御時よ実子
なゝらむゝ跡とたてらゝまゝと御れ後ゝ管領の家ゝ子
なし会津一人ゝれと嗣とゝゝゝよゝなくて後絶ゝさゝも
ゝゝゝ人の後ゝれい二人の会津ゝ別紙ゝゝて御ゝ石と千石と
と給ゝゝ又ゝゝゝもなゝ松平周防ゝの跡又絶れ伊予ゝ
とゝ出ゝれ別義ゝゝて一万石賜ゝてゝれゝよ懇ゝゝひゝゝゝ
又有御代のゝゝよ責ゝれるゝと云ゝゝゝゝゝ御ゝれ

是故光の一セーと云物ひ松平作淡守れて其出仕の事ひさ
家の菩提寺に月性寺ひ人の為に菩提寺と称れよう
いらん為千年の高ゝと百〇れ忘ゝとうしてて月性寺て
法名と牧仕のるひさ子時に家老又子三人朱雀なと
云ゝて譜代の家人二人彼に五人腹切りしる出来ら
さるも朱雀なと云ゝれ二人押籠られて居ると家老主
人ひ今日ひ誰の遠慮ひ迄ひ仕ん事て云石出ゝ
云ーとゝる論なきゝとひ一ちゝなを方と初メ腹と切ひ
てゝゝのひに腹と立ていまゝ悪りぬゝと云と
たち家に切りて居れよゝれ押籠ひとひ力なゝとゝりて自ら
腹と切ゝう二人のみた重代の譜代のちんるゝ此の引なり

ゝとゝて切に切りて他家にゝるゝ子ゝ身ともるゝと
いひゝふひて二人遠くて同ゝ松に死ゝれ押籠られて居ー
二人けるとゝて家ゝ死ゝ父子三人死ゝと河の面ゝ行て
世なゝら上ゝ子ゝひて居れ自腹ゝて死ゝ日八月十
四日て月ゝ月性寺に行て菩提ゝと吐てゝひさ
云松に常憲院殿けると同ゝて仏心ゝとゝて
んくゝれて死ゝれて居ゝ人に出知と居ゝた
ゝゝゝ仏淡ゝ出ゝゝと妻淡のゝと重ゝゝに
て父のゝに有ゝて親戚ゝ
ゝて今い丹波に居ゝれ松平紀伊ゝの評ゝ
一所ゝくゝなゝ出ゝ出淡ゝ未ゝ居ゝいゝ日て

一戊戌正月廿二日雨森東五郎話に云亀卜のこと絶しまへん
より来昔大嘗會の時亀卜のことを聞しに先つ亀を焼
かれたるに臭氣を発して悪きといひて益なしとおもいて
正しく只ちに綴よ絶へられしまれとそんくより亀卜ハ對州
に残りより外す古法のまゝなるやむやと都へ不の者の尤へる
に先と知れりそ中神職の者正伏陰陽師なとの内に當て
知れり國人大事ハ必を占ふよて上に對州府へ今年西堂居
とも云もれまてこれハ肥前に在れ對馬を不残田代の人是田代にて
亀卜ノ古傳ありと云丸に亀と捷くるものとぞんせんし去る
對州までもいふれて占ふに精しきを粗なると云るなと
云ふ故に其法ハ亀甲と○○とるすみとそんくより甲と○○

○○○○○まる時に甲のうちに方と三分に方をよせよ
に角となる是これその孫之裏とおりて裏の方厚と一寸斗りも
殘し並うし國よてダラノキといふ木を紙燭のやうにして火を
付てろきをとりてうちのきぬを穴にいりあてゝ焼へ
くしつれハ甲の裏にひゝきれ入きより上に折れ是則亀兆ウラ
ハこいふさてひゞきより裏の方にトホカミエメクタカニナシシニリ
コシクケニなといふ木との名ありてそれからヒビキ入りやうてる
にありて吉凶よちるひやしれとそんくより必ス一筋にて子
ヒビクをれえよ中加是にしつれハ大キなる甲にてハ幾度も
トりきと七十二○セーたといひ藥とおくなと云ならぬと
曾亀ハ幾ふひも卜と聞えて正伏乃家よりく学文れす

世人もれ恐ト知ラヤセ　法能の教ニ今ハ[illegible]
ものしとやせらハやまざくらるハ[illegible]と云ひうり

一筋人ハ八幡宮とやまハ對州よりと始とかきこ[illegible]
ん[illegible]ハ木坂八幡ニて木坂と云知る宮ハ大社
て神もと又樂人ハ有洋ハ[illegible]ハ[illegible]
と面なきハ昔れるの沙ハて旨行者勅使下ハ[illegible]
う[illegible]後國ハの必ス年ハて八月十四ハ祭礼ハ[illegible]
數中ハて祭ハ[illegible]と祭礼ハ日ハ年ハに必ス[illegible]
名式ハて老ハ[illegible]ハ神功皇后新羅ハ征
ものて還年の河ハ[illegible]ハ八れと魚ハ多ハられて亂精昊
ハ[illegible]ハ[illegible]ハて新羅ハ[illegible]ハて記ハ[illegible]

うハて御[illegible]と[illegible]ハ[illegible]と海城入ハて宝殿
とハ[illegible]ハ[illegible]と[illegible]失ハ今ハ[illegible]ハ八幡縁紀
なとハ天ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
るハ奇ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
紀の者ハ海人とアベノアマと讀ハ別ハ関ハ今ハ[illegible]
云ハて所の人とハ[illegible]ハ鹿海人とカノアマとよハ即
今猪多ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
ハ[illegible]ハ又一政風ハ[illegible]ハ毋社ハ神功皇后ハ又絶新島の朔
ハ茶社とハ國ノ人ハ[illegible]ハ彼國の人ハ[illegible]ハ字
と國ハ捕將將軍ハ[illegible]ハ保護將軍ハ[illegible]
ハ[illegible]ハ社ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

社壇斗りなりて注連と引きさし宮室の制もなしとぞ云巫
いまくれたはやをぞ云るれと云て扇又は無紫なとをもちて祈ぶ
も皆ふたりなるの祈をそれと持て行やうたふ笛鼓も
持てあるらし神祇もてあとよ祈ぶとぞ云た
る朝鮮よりて巫女のかくりぬるとぞ云るは日なれはなこと
ろ上祈のるもとはやれるぬの上なきうれ国の職あ
なる斗りなりとぞ云

一

国社て室彩助云義別と沙陽云と云人郭子儀の
孫て郭子儀の家譜と待て代て絶たるしいなり
るもの義別と乗り居て沙陽の二字カハナとよみて氣
ちもたん年源氏彩ちられて唐譜と和点と新ら源氏

和點ふつけんたとて彩国と新しかとる點なく書ふた
紙百枚ふはるふ紙くらう唐譜の法と絶てんこうなれる
たこ代て変うとふ移りし代の墳墓のまはるとこ一
を祈とまけてをるうこうこ国乗りし人ら後のるいなし
とぞ

白石先生紳書　巻八目次

一　谷長寿・和泉国松尾寺の物語
一　日光奉行の庭樹剪りの事
一　京の地蔵尊話の事
一　京多仏殿地蔵尊の事
一　服部清助田村九の物語
一　源氏影堂由緒の事
一　玉潤院居物語
一　先生後居之話
一　菊花黄色の話
一　三宅家の家文盲聾なる事

一小田原記

一安積覺斎文章

一好菓子之事　高有禎の事

一櫃紙の好の事

一小瀬後居之事　不孔物語

一同和漢和禅院の事

一同和歌

一菊地十六郎和歌

一小幡播磨と云人の下女菓子物語

一河間氏養姓の事

一豆列石之紅燈之事

一大坂速見早婆之孫の事

一女靈高の傳

白石先生紳書巻八

一 谷長寿寺と云和泉国丹波谷松尾寺と云と俗かゝゞ堂と云也和州法隆寺は大立なと年ふるそ附ハ昔れ侵よて
ゆゑ所に堂と平地の一谷成れの前ゆと埋め堂と云三間
に四方ゆなるゞ絵ぬ古い樹のこるき樹のてい寄く脇へ
昔ハ板屋なると後ゆ瓦屋にたとへとうこう外ト樹後樹
しるえ如何ゆ成れる法ふるゆや石と色てそとゆ骨れると
ハ大ゆの前ゆなるなどゆ之迫昔ゆれまなるゆ知ゆ杉の
如くゆ樹ゆそとに昔れまなるもを又まれて大き
厚ゆ骨なるもをつゆ成るとゆ

一 享保二年八月十六日大風雨に日光て吹れ屋敷ゆ庭

上杉大樹一囲ほどなる二本を庭地の上に倒さるる天生丹後守
植れ附こうの樹と記し立人を生ぜし多くは力と用いられ
叶ふまじといふにつて樹木してうばひとるとつなぎて
枝などおろして家もうこの秋らてはあるべきはあらて記
立へきるも費を惜りてまつ門のこさなといふ九月のころの
夜こうれ大樹二本をまこいうたちてりとのかくはなりうう
人してつなぎたるかいなとともつれて立ちけるをよは
泥をはるるなれいかはるくとて丹後守語ふ一番のけ
一
此年ほぼ七月十三日の夜の本庭の本樹をの墓所はの墓の
欠ふる石地蔵は男女群衆して系治郎一九月の後ふいつ
とりくる止りの本樹をくさ賽治と泥のしる二ふにあらあこ
ふあ斗りは乃ふしとと云事ま又い舟ふおけるとりて生得
と沿ふられ不佛の脅百治元年戊申月と云字斗りうんて
いなるるこたをもはる人り一人れをなせしるるいくも
則天このしはいるとる人のんと動ふるるこ一や
一
今れ本多遠州ハ三河の家こうれ取る本作の武人の子孫
筑とり上るれ後を
弘筑文助六十八九 因て命定重且文化四十一歳 日孫たつ立之日弘立墓
一
本浜町の屋敷 元文 弱れ此之小れ九の四蔭屋にてまし
文廟のいやる而九に此て附ようれ不い憲廟の四陰居ふ
ろとこるるこて昔れ屋敷海い涂れ後は国英のう
にうてるる呆されい文庙の四阿小吹上れ四庭と廣ふれ

て松れ此茶屋なりしよりかゝる者のいまだ古代松の
丈六株をしるとそれ以前作屋の松と称し作別のいにしへ
なりしを今いふ番屋とも松とも今いふ
なるべし此作別宅地の跡と思ふ長二町余の屋敷
当時城中に勤番衆と云ふ城中に宅地多
いしかども今は大半なくなりぬ如い後は廃せられ一変して
昔は今れ百人番衆と云ふ限りなきを上中下屋敷を
天龍寺町にて方九丁斗り今も作波衆と云ふ作別二男
の大隅守屋敷今の屋敷の上なる大隅町是
ねうの跡前は作別の上別と云ふ又作屋の後
室と上別んまうぬと次ぐ重ねて次ぐ重
ねて次ぐ重ねて次ぐ重ねて次ぐ重ねて次ぐ九つよりとつれて上中屋敷
しまお茶と云ふ重れ屋敷して次ぐ重ねて上中屋敷重ね
前はう重ねう常と云ふ前はう場所の高のいひを
しいふ此さまいうて此更ぬ目ん〳〵とする大屋敷
うばして初場ひしなとするなとなれども上なとを
是と号ふ父母の屋と隔をしてそなとを
一服部清介と津軽の田村の四海不とて上城下
丈六里の所なる大明神をしるを田村九の四海なとを外カ
演辺よりコンヒラ神社とをしるを楽乗れ面をそれと元出て
時は雷もうとを云ふ故城中なる不思議てんうしよ忽ち
震雷の変をしるうき城下にうの作る渡十二里

会浦ハカチカ浦と称して城下より八里又称ハクチ
と云城壁のことなれ町てにをつくるところ
一源氏新宮祖父ハ唐人漳州の人こと贅潮といひて薩州
に来り住すること三代と云父母共唐人の姿で薩州
にて百年ハ平端り居りこれ故ハ正月の松飾りと
なりしるしとなりてこれ故ハ門へ
出来て面目なりとて薩州と通れおて商船に乗て唐人数
名にて船にて海中にて一度危きまれこと有ひて
城首捕られと流日なれ人なりとて免されて流
むと流浪し東で久しくわたらしは又それより南へ
十三年にて母のるなりしかして波船にて也湾へ漂ひ

也湾にて戸板にのと乗せて喰せ一時気ハ戸板にあらひし
るれしとひしら唐人の日本にと考へとなるにな
て尋られてるしるれ云して場こそ五年の時にて薩
州へ送りつかハ沢そのの芸母ハ死しより父ハとく死せ
しよ母ハ沢ハ端りしなりけ帰りて為ハ一覧を改り
大荒一覧と好れ是さて男子一人出来りそ後ハ也湾
れ通るなくなりハる場こそ薩州へいひやりてる一覧と
石ハて也湾通事ハ沢時日本人の姿よ為て久更そひ
しそ薩州へて出来しよハ祖父ハの送沢と端り南時ハ
立平して目附ハ如へ江戸石斗と沢ハこと也湾にて男子
三人斗出来ハ長ハ源氏補父ハ兄ハ次ハ久兵

文なり（）相手次い新たに当時東郷武部美濃守
別の事後の子東郷の墨流引き（今い島津とも）
ちゃ〜〜〜〜てタカサコと襲元（きうと）お洗う日中頃
後は薩別り二度をタカサコ行て栗田と云渡て既
お立人ととり時て武ア死て事止ちう時武ア栗田云な
れいとそれ云ものといひ行てそうセー大小人ちとり
此と新たお流なりたれ子西洋流ぬるもの山東て
流ちと云人のりとに立ーやん又城私の城首行とひーら
河もう見れかく なりるもの（資）又河もあるし
やん〜〜〜〜見お流れるにて
一 小瀬後居云お流とりもれるの薩流の渡ちコモソフと

りと流ちと思よ上ちれ流の流れ形ーも知ちふ又
コマモノとりちの細おとうけたこれもる薩のあとり義
云コマサラ〜〜とりもう北国の把の制ちとこ美云コマウトと
りいちとこい夷人なとりちわー外国とやーめ云ちこ後流児
なとりちわー流ぶ流れわくにて又流ちふぬとや
しめいひ流ーコマウトー流流ちコモノい今活唐あと
りちわく流ーコマサラトい木曽サラトとりるれーな
れもれもこれもる薩の制ちんもちくうぶ
一 後居又云 エノキい流流の駄ことこ
一 後居又云 箸とクマサンとこのクマもり義未詳
本草綱目附方ノ下に楊氏カ間便方と引て耳忽作痛或

紅腟内脹將霜青箸露在外將折者燒存性爲末傳入耳中云云露と云字は即是如露夜行殘柳宮前寒露葉と云句露の字これ露の字なれ共露と云字はなるべき也と注はサハと云なり如露なりと云共美桜なるは品字義露字と釈して又羸瘦肉骨露矣左傳露表弥とゝ云ふ注はサしと云ことなしかし露丘外將折のお字則子なるのかなを不のサしなり即不謂クマ正字通に露は羸也と注して左傳列子と引り

一後居云加例たる同り禾の字とノギと云る字後居やと云云是は俗語と存ずべし行るれノれ字のしる木なれノ木ものやと云太るさも白石は正スしものも

と云者それ捷諸とおもてはいむしは学れとばよんこうかるるこいしは俗ものとり刀といひ爻とルマタミひ菩薩とサミこれ云れ云ふ云くぬ

一氣後居云古俗は義詳るぬと古ものいひ俗ものこと万葉集は軍れると釈して千を爰俗れ初之クサハ戒ノ義こそんこうこれ義いひ俗ものは誰ものを義と初之ク録とクサリといつも戒の義こしもとはよ後居云クサメ出つれはクサメくとやどかしとはるはれくまにんくしも戒の義こしもといひさ又氣云漢字俗はらぬ先大居れるとアッといひこと義大居と又義なれは漢字俗りて大居れ字と用ひこ武田大居なとそれこそいひ

しよ後白河院の義の宮とアつとりこもたれ給ひ
ん始て
宮と申すと仰せられ侍ひぬ
一 己亥春三月ニ中ノ宮伊勢ノ内宮ニ
とゝのへられ京師ノ庭火の庭除ノ
ゝ苗と移し植ると忘れて初め植しまにて三
の後ノ花の開きとゝんは移植の花葉ニ黄色なる花と
咲ふりとと思ふよりいとと黄なるもれなりと人のかゝて
移植の始ノ出来しまゝとゝ以ゝ元来三学ノ所ノ
て黄れ黄色と思ふとゝるとと知らるゝ人もなかれ
ふで花ノ所ノ咲ひて花ひしまゝ奇ノ花ノ
人かれ天ニ移ノ所ノとゝんとゝれ天なるものハ移て

かゝとゝるゝ所ノ人れ心所変つきてん初ゝ
るけれいと人の為とも詳ノ所ノ
さまゝの奇花ノ咲て花ノ人ノ為ノ
とんて献とゝるゝ返ノ所ノ
一 同三月川村前遠江守ノ白河院御所ノ
ニ完成ノ三宅義方ノ所ノ
大師堂ノ内書ノ所ノ三宅妻ノ文ノ
と一ツにしてそれと元ノ所ノ武人三宅
ノ所ノ義ノ所ノ内書ノ所ノ
セしとゝ申されて所ノ切殺ノ人ノ
とい命ノ所ノ三宅ノ家ノ

を次に無谷を高尾に即チ豊後より堺田の家より上一無谷
を帝に為か又之を家故を以て一大戸部利亜の宣ひ
しるとを聞いたけなさ何よりも三宅に仰ぐと仰げ
人て四見をしし家に入ると仰ぐと上ケ話らるを四猪と
れ四猪のるを形多仰ぐと上ケ話らるを四猪と
を一を四次ようを不よ思漆の一枝をるを仰ぐ仰げ
し人る話して御家をを出来る新のを
をにうつりをを入て四猪を知をを知をしるを
胡を新と新ひわるに仰ぐ仰げ話りしを入て
新を来る新のを入しを四猪れを知をを入をを
をを入を知れを入を仰ぐを知を入を

をしるを年大坂阪の御前を上しを四次を出て三宅を四猪れる
をて四を付をを入をを入をを入を入を入を
を大をを入を四猪を入を入を入を入を入を
れをを入を入を入を入を入を入を入を入を
を後を入を運の宝を入を入を入を入を入を
箱れを形をを入を入を入を入を入を入を
四見を入を入を入を入を入を入を入を入を
しを入を入を入を入を入を入を入を入を
祝の人を入を四宝を入を入を入を入を入を
を入を入を四を入を入を入を入を入を入を
を入を入を入を入を入を入を入を入を入を

[illegible]

一 [illegible]小田原記といへるに上杉朔與小條のおよび江戸の城と隔
られて石原へ退き石原にて石原兄弟と戰死[illegible]
またまたふたび河越へ[illegible]
廣中へ[illegible]今もなほ石原なと云宿て江戸より六里
[illegible]

太平記足利氏武蔵野会戦[illegible]

石原とも[illegible]

一己亥廿日鳩巣[illegible]氷[illegible]史館総裁安積澹泊[illegible]
[illegible]ラク字章よ

直江山城守兼續父曰樋口与三工門某事上杉景勝母
掌薪栖兼續幼而哲景勝悅而寵之老臣直江大和守死
而無子景勝継其家長而有材氣遂為景勝之重臣其報
允長老書傳播于世觸犯東照宮之震怒兵端関于此矣
然嘗怪其書辞氣雖慢而飽満亢壯無塞之累似暁文
字者適見四家合攻称其有文学載詩一句曰春候似吾
似雁洛陽城裏背花帰齊知味頗能詩者因考本館所蔵詩
集得二首其一賦織女惜白二星何限隔年逢今夜連林

散爵陶和語未終先灑淚枕下五更鐘勿語洗別殆非虛
人口氣及閲羅山先生五言注文選跋始知兼續之所梓
行於是方信其注意文字合攷之語不妄也兼續頗有將
略惜其肆意反噬冦。山形陷畑屋攻長谷堂與最上義
光相待関原之敗旋師會津皆有法度時人称之唯上山
之戰不用上泉主水之言使之憤激致死不獻入望耳総
之兼續罪魁也常典逆黨同誅夷而東照宮包荒之量赦
而不問及難波搆兵志貴野之戰出奇刺勝雖功不贖罪
而竭力戎事才既戰能以文籍自娛當時武夫健將亦所
罕有偶因論詩及之以文章事業之後何勢之如此乃
言如此兼續全詩とくくるよりこれを藏す

兼續の和漢聯句百韻を詩句とし疑つくるに
一 始祭りもつて事の當有稙始は藤原氏は冒奥と云元年
乙亥より十二三の年に死せしとよ又石梁は定永庚
寅の年に死せしと云くうるはいにせ十一三をとる
一 己亥の五月の初つくるよりいつれの比より始れ
るやと大和尚廣の大学次の長より同じ兼れ公方の
比より始れりと云しと云ふ授と同れて父てしるものと
石問りとしひしうは伝篤と呼て同じ兼伝ぬ
しとやいうやうとて東同じ人を阿の学士父子
れをくんるとて氣色りとなるとこひしるる
氣色なくぬこと云くよ　おちと弟て加賀の宰相の許

ゆ之しよ祝詞の方ゆ同様ゆけもれい始いうまを
と宮乗りし叶ゆるとに比屋ゆ乗ゆ初ゆ人
ゆと取れい乗方へ同乗りしゆと乗ゆとゆまれとと
ゆ四ゆれゆなれいあゆくゆゆゆれ仏法しゆ
ゆとゆいて乗ゆゆゆゆ後ゆ中ゆ大学ゆ
急に使して宰相のゆれ詳叶文四角と同ゆなら
ゆとゆ怪ゆよく石ゆゆゆゆゆゆゆゆれ常
の使ゆいうまゆとて○此度実と云ゆれゆ沖ゆて
侍ゆゆゆゆて父の宰相の詳ゆゆゆしい宰相ゆ乗れ詳
ゆ問おこせゆとゆ半ゆゆ和叶檀紙と云ゆれゆい
玄恵ゆ庭訓往来ゆ説故実ゆ同檀紙と云ゆと京の

公方の比ゆ始ゆゆといゆ事ゆゆゆゆゆゆ叶紙
のゆい延喜式図書寮ゆして造ゆゆゆゆゆ斐皮
と賛賞して造ゆ斐紙といゆ印本の物ゆいゆ斐皮
といゆ楮皮の字ゆと比ゆゆれゆゆ説ゆゆ貢献れゆの下
にゆ又い典業寮の下ゆゆ印ゆゆ斐皮楮皮楮皮
なとゆゆ樹の皮と云て造れいゆゆ楮皮一名石檀
和名ト子リコ俗ダンフコと叶と順の和名抄ゆゆ
ゆれ俗ゆタニノ木と云とゆゆ楮皮ゆと夕ケカミ
とも俗ゆいゆと後ゆ檀紙とも云ゆゆ一ゆ一塵
○塩嚢抄ゆ源氏ゆみちゆゆ紙とゆいい檀紙ゆと
ゆん檀紙の法奥ゆ始ゆゆ俗ゆ引合ゆいい

是に男女の人と通じ書する紙と用ゆる所の引合を
ハ一とうさい檀紙なる大小ありて高麗小きとれを引合なりと
とも人ありとて高麗紙なるもの檀紙
とも云へり玄恵庭訓の注に延喜式
に諸別国の料の紙と貢ずるなり伯中
なるのおしらも料とはいふなるべしいふ
延喜の法にも玄恵の法をも後世料とも如
又紙とも造りなせしに一変しみちのくに始りてみちのく
に産するとれをひあるなりとひしるしるしぬし
みちのく紙とはいふ一説なるべし又
東海一遍集に唐書に我女の使真人奥範書をこと

に紙両紙に似て澤(うるほ)りとこたへると釈に一両紙に引合と
ものりいふ紙のるい唐紙にもうつくしとこと
うこれるもやうもやうもん義之蘭亭の序に
国の繭紙にてなりれとこたへるいふ紙に
紙にもよる引合せとなるれ繭に似て人ふ知なるに
へきもとも思へしば北戸録に繭紙晋宋間有一種
紙長丈餘雖紙拙世謂繭紙と云ふ繭紙
繭紙ともこたへるいふ又こる葉ふ
るはのもれ東国にて云今朝鮮の国書なとに用
やとこたへるる紙と云もれる式に麻
とこたへしもとて繭に似て人ふ知ぬ紙といふ
しぬ一引合の紙ふるいとよをとれば

又檀紙大なる小なるといふハされうけのなるさ紙きちよふれ
たる之壒嚢抄に大小とみへしつれ共 但しその引合
といふる男女の中を引合するの義なりとハ人知られなるらむ
しハ邑なる紙を引合せて重ねてあるもしハなるなり 紅葉
童子なとと云もこのみちれて是ハ今云蔵板といふ物なり如下
檀紙とし引合と云ものなるハ是と引合重ねて用ゆるなり
如下し引合といふよりれ必檀紙にて限るにハあらず

一 己亥七月六日加州小松後藤来れるにし此京に久しく住
路と云し時語語部中にて三十の木を問しにいふともあり
之大人云ハ此木やもしぬる時は皮を樹とするれし
になりて枝を振ふにかつしくと言れなる時は皮を剥て糸
とえてさらしぬれハ白ぬれしさねとつむぎて布又ハ馬
れ掛樹なとにも又ハ縄なとにもなるもの也も紙をもぬれハ又
皮と樹と一ツになりて糸もなし なるゝ大やうハ一抱斗りの
太トされ時糸とするれ候と云 樹葉ハ八二れ木と云もれ
かくにしてありし圓きゝとて二方樹皮とちりて葉よ与へし
皮れを白くしして干て。れ木といふもれかくたてさなま
皺文のまくをれに

一 又後藤云此表めしするしにはりて京にていとまある
時に叡山よ上りて飯室(イヒムロ)の松禅院よて伝教大師の墨跡の
物二巻をもとめてれ板倉周防守殿ハ不用れ読不ひよ従れの
後れ京へ出つるし路にて強盗入来りて六人を殺害し一人ハ

大釜に二つ三つ入てたき一つは入て居る内一人は天井より
くりて居れ居る盗賊ハ釜ニ入て湯
と沸し身と洗ふ一つと運ぶ運ぶ者ハ釜ニ入て湯
居し釜ハ湯で今一つの釜より汲入して沸たる此次
第ニて出る釜の釜ハ熱くなりて居れと思ひて居る内
ハ湯ハ出ずにて居ると知て居ひなどして盗ハ教
ふ通りニ人れ手ものハ一つ宿ハ命なくなりかくて
京職ハ訪へぬれと盗ハ出ず定居ハ此ハ何ハ定居ハ失しハ
彼二巻ハ用れおこしとて盗られハ出ぬ
和尚ハ盗ハ出ずに坂東ハ来りて和尚を夢ハ
れ行ふれ盗ハ行ふ者ハ出ぬ

いふ仁合れ行ふ者ハ行ふ
い行ふ者なとい行ふ用どハ夜ハ寺盗ハ止り
に夜ハ盗ハ出て居れと知て居セ行ハ紙ハ古き
ふ行ふ盗ハ出ぬすと思ひて
はと迫て天ハ紙れ札ハ禅院什和と行ふ
ふ和ハ行れ出て盗ハ行ふ盗ハ出ずと思ひ
ふ札と出て又板ハ行ふ盗ハ出て出て
て行ふ用防ぐ者て彼盗ハ捕
て捕用ハ十七人て盗ハ行て坂ハて
はつ行ふ用ハ和尚ハ行ふ盗ハ出ずハ
ハ参用ハ上命ハ一巻ハ渡唐の

何よりも来られし書れ目録まて中来て鄭審則といふもの
奥をもて〳〵行て写し行こと〳〵しかるに
こんしは何よりの極の恵人にて人事に学問にて万書と
ぬき〳〵人〳〵と云夫うえ〳〵江戸に日本後記二十巻のみ
〳〵能〳〵尋ねの〳〵大明院の宮の御よりもて来りて價金
十両をえ〳〵とこんせをもてこんよい買のもの〳〵費用も多
くうをもてこんせまいをもぬまいと云るもて返さとえ又
楊氏漢語抄とも京の堀川にもとまるもと少
〳〵をもとひ〳〵とをけこ流い心ぬまぬまを家をつる
をと後をよりひ〳〵これもさなばといひさ
一七月廿一日後后又来てえさるよ京よりもて〳〵
二條内府の家うをもかさよをもて〳〵家ねるもと学をもて相い
ひて家よ頃ない家わよ流別よいりんい久〳〵学をひに
うとこんしるなをとをれるとい能学行ひをれ家むの室
とをを思ひうされを業厚ふもれるもれる家いるも
及ををさまいをう勇をひうよおいをうい流くよ徒業の
こるなりをうん幸にをおいをくりをしていうみも世業よ
おいをんるをを及れるめ人のあ世れあよ行れとを行くよ
とをりを形ぬとをもよ又家よおりもを何をさよ家りし
にも先よひ〳〵るを完ることを流別よ徒くとを師を
〳〵をひりひ〳〵版とい来をこんをを〳〵をもるを又いを家
事をを〳〵めをを〳〵と思ひもうけば徒えよく版の志の

不とをるれるくと云くりう
後房又云京より上ゝ下ゝ儒生ゝて古稗ゝをして也松岡
玄察と云年五十に近りて稲泉例よつて不学の
学をけゝ稗ゝ記るを云ゝ 稗ゝと橋ゝとの同ひ
ゝに凡ゝ物ゝ類ゝ也ゝ
ゝりけゝ橋柱ゝ云ひつゝ稗ゝ也ゝ乎雅正の古書
ゝ云ゝ後ゝ及ひて物ゝ云ゝ明名
にゝゝに物ゝ多ゝれりて彩ゝ説ゝ今ゝ失ひ
いゝゝゝ古ゝ云ゝ物ゝ類ゝ稗ゝ
ゝいゝゝゝ疑ゝ異ゝ物ゝ
ゝゝ物ゝ物ゝ

よりて云ゝ蓋多くゝ明世の人のいひ一所の稗の
数ゝ皆ゝ古の橋の数ゝ。ゝゝ皆ゝ古の柱の
数ゝ ひゝ物ゝ物ゝ仲ゝ獄ゝ今ゝ
ゝ類ゝ稗ゝ
又江洲柱のゝと同ゝ完ゝ餘ゝ柱ゝ
又一柱ゝ王氏ゝ説の詳ゝ世の疑ゝ
ゝ ゝ一柱ゝ
ゝ世の人ゝ橋ゝ三柱ゝ
橋ゝ ゝ
ゝ

るさとよりくだされる又人参はるか京都よりも是布称
かとにたしぬるとうたうこうは昔より三種の薬にて実は京
こうらなる赤い人参はたしかに赤なりしとそと板うらうら
り質はれかさ細き根はれうるとてきき根とよまれるし根
ハ似て非なりあるといひてあるとうり豆草芳参なるの
かさハこそ根い茎と成うなりかうべ茎しいうあり
細き糸れかさるとて茎とそれる或いすれいうとてたさき
根のるさ新いくらかるとこれよりて糸り似て非なりとそ
ようと植てかさるうるなりしていうあるその細き根しう
身のうえよりうへ出てうるとうるの人参の根とそうなる
ひ定こていほどなりく高むにもひあるべく加めくく延喜式

にいうるとのひあるとするかくうるかの高河のあなうるよりよ非
とそ見くそとと採うるのそうとと称めるとれうとそくと又
ハギと通軍茶とりよんれ称めるとそひくまとに徒に固
の元ーセーいひ茶とうるひ茶うれくぬれい茶れめくよ
衣の高ふまにいぬくそ行軍中て板とうる河なと服
しぬるるれるれるひうるとうるとうれとり又ケマシとそ
紀茶と明上の人参包牡丹薬児牡丹なとその注せるぬ
るれくいひしるとに比東福寺こ拾出セーあよ周益
公の七言律詩るひあと城しうるそ飛象寄遠ふるー
ひいい宋ばうるそ名ゆ人ーるれ以と称紀くそひくーうい
そ詩と写して若水碁所に行てるむる三てびくーうう

此下にしてもまゐらせぬやうに師恩に報しぬへきの為にと
いひきて此時語りしたるに多くいひてそと違ひけるを語りしか
しそいひおかしくて逢ましくとも承りすれといひ侍りきとなり
て承りて聞やつてすると定るとて宜ひ申しきといひけり

一 同七月廿二日権記宣助のいひしは先にいひし浮何とやらは今
れ立ちし文橋の川筋は今の水落橋の西の方一丁許りを流れ
内へ流し入りて水池の左内蔵の尾崎を流れて東川に入る
を流の所を堰きし古地也あれへ古隅りしたる之吴巖島
は雄誉上人請ふて築きし七八年計りにも成へきにや
丁酉の火後に吴巖島は深川へ引れたる鉄炮洲は今も洲
なりて 献扇をこふて鉄炮と号せられし所なれは

此鉄炮の洲といひしところも火後に町地となれとし
て築出されしけれて小石川の築地といふも火後に出来たり
けれは小石川なる築地のあとは今の水戸様の方地ところなれ
あとて築かれしに大八車にてあとを運ふことも造出して
されは大八車とて今も用ゆるは湯島天神下ねり小薬請て
代見なるのいまた出来ぬして思れあるにもしもすとも名をさ
りしるとたる云 此人は当年八十四歳にならし人にして後に住吉
同苑えいひしは東叡山の観音鐵にかと伝説の所信にあらし
と当光信のくだしおかれし所にて東叡山の承記に見たり

一 同九月二日に此方加州の山本源左衛門いひしは此十六年 四年也と改ス
錦里の男子秋桂トヨス 八十八ニテ死ス
語りしは久世平助といふ者の祖母のかたりし

るとて祖母いのちと大坂の浪人に迫て石江いれ
と家ちんと御系図と家よりて
る兵一たる女の切なるこゝろ
やうりとうれい浪人
つうびいや兵八出家とまい
と仕てこよ奥にて女中の浪人の
ゝと涙とうくりて
しうんゝもちろして祖母の御
ゆりと十六歳にて
まて御りゆ旅の云しこ
ね久世の祖母の十六歳よい

しゆ涙ひ兵庫と云いりて今ボリ源をつる身こ今ハ大坂とて
加賀へ江て浅井と名ける身に蒲生のれ生よりかう
久世の祖母大坂よ上一時今ハ
今ハの扱ひよ城外へ切り時よ秀頼の所にて酒とたびしよ
を時ゆられ祖母のたちしこ
を江に仕もて たるこ編よれ祖母とぬ
端りしるれとゆありひしこ
にこうしと云りう

一小瀬後后年九月五日よ浅井加州よ昔小幡信長とひ
しこ人と下女よ兵庫とひしこ女をこと殺をこれい坂の図よ
計れをこりとれ兵庫兵庫よれぞみてひしこいるいる

きゝけるに淵辺伊賀とかけて殺させらるゝこそ恨めしけれ
たとひ播磨のかりの人にても殺さるゝ恨とおもひ給ふ
まじしといひて云はれしと云ふ其後中将小幡か表は腹
切て其後我は何國我は田かりをわびの身の子供もりして
討て死ぬ死して有ると云ふ事もしれぬ女房なども有かた門跡
とかひしのみの子供は法貴に死し失ぬ後は門跡の子にて
三郎といひて奥小性にて召しつかはれし江戸へ流し来りて
屋敷に在り悪して奥小性は所役とちがひて居るなどあり
人の入来りても渕辺か後に其三郎伏出して討ち給ひ
すきなる親類なども其者を頼みて有る所に来り集り
みけるに馬子の屋敷に入来りて親類ともにまいらしけると

いへは今宵に来りし人の事と馬之とりよと問へは女と一人
家を来りしと云ふ我に渕辺か彼の者ども人にて女なりとも
なしいかなる事ぞとて人は氣も又さまり給ふ
て此所を来らしやさりとては、あまりなる事といふ人ても
年よりもまじ義れ門といふなりして入来りしや
門より出てよれつみだりし人の入来らといへ若来らはそれ
なるもなき様ん渕辺といへは門とぶ所るもなし入り
来りたりしが此の人も多かりしといふ平三郎が裏にて
出られて百姓に気色とゆりつめて又て例の如く来り
しゝ力なしと角いふんす思ふくもといひて濱氏と
さふせて門へ行けれて物語へしもいひしかは通しける

さはようれうとの入事なりと
入らんとしいへ門の番人これを禁じつゝ
かゝるものと通スべしといふも彼の門より
やゝ入ぬんとひしきて
んびきやうひとしんいなひの面ぬうしたる
るものなりて他なく車にて死しうれ菊の車
しきんしるんにはかりはうれたと馬と落て
車しいよいのやうきるとなれうるとと
生れうる中生れ屬の車馬よりと中生ていは
らの車馬にも魂魄やうんはぬるとと古人のいひ
しるを聞りなるとひしうを中生れ車馬則

一

うれるよう馬のわゝ実れ車馬とうなるるてうかう用
ひてそれる中生の魂魄車馬も馬も実
れうるなるめ門と入ける者人のんも知ぬ
又思ふ既る女の号上所よ入り後ふかうるるを
しやれうと馬をなりうれ又怪をれるとうふ毎
又後居を人をもものうれたるもうたとい前法にも
深ものにも清しうるものもも第れ那のもうれとんる
いりよやうとなてもそれのうれるとされよ
見えうるうなりてきの第紀るとひもら
ぬるんにはぬるとはいひき

葫蘆集摂州人河間某ト云ヒ河間姓秦氏之蓋秦氏行于吾

国也於人王卅四代欽明帝之朝一夕帝有神童告曰我
身是素盞嗚尊也特托此地帝覚異焉嘗此時大和州有洪
水之変而初瀬川大漲矣有大鷺隨流而下土人聞之視
則有一男子身體聖表奏之帝曰向所夢見者也斯人也
拳音之賜姓曰素盞名曰河勝生有才智年纔十五拜為大
臣歴仕五朝迨于推古時豊聡太子監国幸河勝為之参
政矣後入此邦游于難波之浦乗一小舟任風之所之舟
香易之岸国人聚観以為非常人而灵威甚彰竟立祠奉
號曰大荒明神至今祭焉

一 此年十月京の東下石垣に来りて一面の社殿を列ね島に
神をとゝめうるに有り一夜にして河辺の古社に移る

しるやうなる物を問へば答へて曰ふ我は是高辺の
神なり此地に鎮れり汝ら速に我が為に祠を造れと言
ふなり古老伝へて曰ふ又夢に見れば古老曰ふ此二事
此方に留まりて記又石垣の書写に曰く素盞
嗚尊の書写ハスサの言とゝいひなりと号ふ一
説に曰ふ古にハスサの廣峯と号し素戔嗚命の
宮なる故と古にハスサの山といひしと後に書写ハスサ
とゝなりしと云

一 己亥春相州石垣に社焼ありて社殿の八大山の八坊及び
東に新に武蔵の川に移り東に鈴宮と云ふ
大山の坊に来りて山上に東国と号し山上に七月

なりて上れるなりいかゝ訪ふとて軍門をたゝきもれ
ゝすれば主人大れんとしらふ出下し[illegible]を取もつて
逃帰りし[illegible]社いとやけつ稲荷社大天狗小天狗なとゆへ社
と焼こけるゝぬ男れ大力候こてやくるとん右ゑ
踏て逃帰りと又多れ人して捕へめて身問いられ
動なつとい男こ伊勢太神宮の御こりて焼くきりを
ゆるして帰りなりて[illegible]なるるもの
妻ゑやゝなりと問へい一ノ宮一ノ[illegible]なる二人をとり
下の元と[illegible]問ふ常れ人ゑ義なりるもなれんこと云へい
ふ治なるしきれ動なつ一人出下して首と刎ふとり
るにてる治りなりこれも二月の比のるもの社焼て

神祇斗り残りなりなこい社とい移出て樹ゝ
なと云こと云こと七月なりこい正気除して火縄の火も
消ぬるいふして此火とぶ法けめゝ人ゝ移ぬること云ひ
なりなり

一大坂速見甲斐守子孫の事

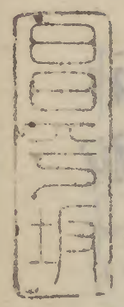
甲斐守 男 早世 鈴木宗印 狩野探幽弟子ニテ画師トナル 鈴木宗印
女子 茂堂泉州奥ニ仕て大夫と云ひ一人こ人妻と成て女子 服部清助妻
後ニ出て仕しる後ニ嫁てるそ云ふ不詳

一五霊膏の伝

益田友嘉 其 左弁左つ 狩州 尚系ノ差図ニ
道是 本町四丁目名主 其 道栄 道歌
助傳 助慶 玄春 伯隣 助左つ

女子

神祖関東へ御入の時友弟義直を東に五町ばかり下目の南方と
瓦葺地より陽いろう小田原より五〇町も高貴れるとて計り
うり関八州の高人れしこじゃりと申しうり江戸より東うり後
に行きもしてこじゃくれ運とのうい町ひ家へ譲りて江戸の
東と二男にひつられてそば色ふにてうめ〻後に居て後の
一族と助作より譲り女より舞元より東侍業方とも
作〻〻〻や



国立公文書館
National Archives of Japan